

ヒョウモンモドキ *Melitea scotosia* Butler

【選定理由】

本種は、北関東から山口県までの本州から記録されているが、局所的であり、1960～1970年にかけてこれらの多くの産地で急速に姿を消した。

愛知県では1960～1963年に成虫や幼虫が確認されているが、以来その生息は知られていない。

【形態】

前翅長約30mmの中型のタテハチョウ。♂は名の示すように翅表は明るい橙色地に黒紋をもつ。♀は褐色調が強、黒い斑紋も大きく、容易の区別ができる。ヒョウモンチョウ類に一見似ているが、形態も生態も異なる。

【分布の概要】

【県内の分布】

愛知県では豊田市（旧小原村・藤岡町）が唯一の産地であった。

【国内の分布】

日本では本州のみから知られる。中部地方では長野県と山梨県に産地が比較的多かった。岐阜県では飛騨山地と東濃とからのみ知られ、近畿地方からは未知、中国地方の山地帯にはいくつかの孤立した産地がある。

【世界の分布】

国外では、朝鮮半島、中国の東北部と北部に分布する。かつてはヨーロッパに産する *M. phoebe* の亜種とされたが、現在では東アジアの特産の独立種とされる。

【生息地の環境／生態的特性】

本種の産地の多くは標高400～1,000mの山間のマアザミなどが自生している明るい湿地や湿性草原であり、極めて局所的である。幼虫の食草は、長野県ではタムラソウ、ノアザミ、ノハラアザミなどのキク科、愛知県での食草はキセルアザミ（マアザミ、サワアザミ）であった。キセルアザミの分布は、必ずしも局地的でなく、ノアザミやタムラソウは山地での分布は広い。愛知県の産地は、丘陵の窪地に生じた湿地で、周辺はマツの幼木の生えた疎林であった。本種とともにヒメヒカゲやウラナミジャノメを産し、晩夏になると湿地周辺のワレモコウにゴマシジミが見られた。

成虫は、年1回6月頃から羽化し、高標高の産地では7月に最盛期を迎え、1～2週間後から産卵が始まる。成虫の見られる期間は1か月以内と短い。幼虫は年内に5齢に成長し、巣を作り、集団をなして越冬し、翌春9齢まで達し、蛹化、羽化する。成熟幼虫は単独で行動する。

【現在の生息状況／減少の要因】

日本産の蝶の中でオオウラギンヒョウモンと本種が絶滅の危惧がもっとも高い。愛知県では、1960年6月9日に豊田市（旧西加茂郡藤岡町）三箇の標高460mの湿地で1♂が採集されたのが最初の発見である。同月19日には4頭採集、20頭目撃、翌1961年4月には21頭の幼虫が採集、6月11～18日に16頭の成虫が採集された。1963年6月23日に1♀が採集されたのが最後で、以来愛知県からは確認されていない。このほか、同市（旧小原村）大平と北においても目撃記録がある。長野県の最南の産地であった下伊那郡売木村では1968年の記録が最後である。かつて多産地が少なくなった長野県全体でもほぼ同じころから激減し、近年の記録がない。兵庫県は1976年の記録が最後であるという。このように日本全国の産地から、ほぼ同じ頃に本種が姿を消したことから、産地の局所的な理由というよりは、種そのものの内在する原因、または日本全体に共通する環境的原因が考えられるが、明らかにはされていない（高橋、1976）。

【保全上の留意点】

本種は少なくとも現時点では愛知県から絶滅したものと考えられる。もし、県下で再発見されるようなことがあれば、環境全体の保全など緊急の対策を講ずる必要がある。

【特記事項】

英国では、近似種が一時的に著減したが、のち回復したという事例がある。種の保存法で国内希少野生動物種に指定されている。

【引用文献】

高橋 昭, 1976. 名古屋地方のヒョウモンモドキ. とくに extinction 消滅について. 佳香蝶, 28(107): 33-37.

(2009年版を一部修正)

県内分布図

